

河野哲也 著

『エコロジカル・セルフ』

ナカニシヤ出版 2011年 18.6×13×1.8cm 146頁 ¥2100(税込)

『意識は実在しない—心・知覚・自由—』

講談社選書メチエ 2011年 19×13×1.8cm 232頁 ¥1570(税込)

伊藤万利子

河野哲也氏の両著書は、人間の心的機能が身体と環境が循環的に相互作用する広域システムにおいて成立するというエコロジカル・アプローチの視点と拡張した心の立場から、新しい心のとらえ方を論じるものである。

『エコロジカル・セルフ』は、心理学におけるパーソナリティ理論を検討した著作である。心理学においてパーソナリティは、個人とその物理的・社会的環境とのかかわりにおける個人差を規定する、ある特徴的な思考、感情、行動の様式と定義される (Smith et al., 2005)。本書によれば、従来のパーソナリティ理論はパーソナリティにつねに一貫した同一性があることを前提とし、心を個人に内在する身体性のない集合体として扱ってきた。これに対して著者は、過去から未来まであらゆる環境で人間が一定の思考や感情や行動の傾向を示すことに疑問を呈し、それら人間の傾向性としての心理作用は、身体をもつ人間が社会的・文化的な人間的环境において絶え間なくふるまうなかで成立していることを主張する。エコロジカル・アプローチの視点では、人間の心は個体を超えて他者にまで及ぶものであり、自己は自分のニッチに存在するさまざまな他者への共感や模倣を通して複数化していくと考えられる。そしてパーソナリティの同一性は、環境に接して複数化し、ときに結びつき、並立し、対立する自己を調停するダイナミズムに特徴があると主張される。また、共感や模倣によってある人が採用する行動が調整される点で、他者にまで超え出るあり方は規範的行動の基盤を与えることが指摘される。最後にパーソナリティ研究に必要な観点が三つ提案され、論が

締めくくられる。

『意識は実在しない—心・知覚・自由—』は、人間の環境の適切な記述によって、二元論的自然観と物心二元論を放棄し、新しい自然観と心の概念を構築することを目的として書かれたものである。本書での論の展開としては、まず第一章で、拡張した心の概念が示され、心のはたらきは、社会的規範によってある目的状態が設定された環境と身体との循環的因果性という機能であると主張される。第二章では、クオリアの話題から知覚が議論される。知覚を含む心的現象が発揮される抽象的な場としての意識は存在しないこと、知覚は環境の変化する刺激作用から不変的な構造を取り出す行為であること、知覚の三項関係的・記号的側面が指摘される。身体と環境は、知覚を介して情報という存在論的な力の原理によって結びつけられることが主張される。つづく第三章は、人間の意図と自由とアフォーダンスの知覚についての論考である。意図どおりの身体制御が困難な自閉症スペクトラムと脳性まひの各当事者の事例を参照しながら、行為の意図がアフォーダンスに関する情報の知覚により生態学的システムの流れから分節化されること、新たな行為の選択肢の提供に裏づけられたアフォーダンスの知覚と自由との関係が主張される。第四章では、今日の世界において多大な影響をもつテクノロジーなどの非人間物の役割を評価可能なアクターネットワーク理論が導入され、拡張した心の概念がより展開される。この観点から社会制度の実在性が強調され、言語コミュニケーションが検討される。最後にパースの記号論と生態学的な知覚論が結びつけられ、生態学的環境を理解するための情報の存在論が提案される。

いずれの著作も具体的かつ興味深い事例を豊富に織りまぜて、心がどのようにとらえられるべきかについて多角的に検討がなされている。人間の環境における心を対象とした著者が提案するアプローチからの実証的な研究がどの程度可能であり、情報の存在論が社会にとってどのようなインパクトをもつのか、今後の展開が期待される。

〈参考文献〉

スミス, E. E. 他 (著) 内田一成 (監訳) (2005) 『ヒルガードの心理学』, 東京: プレーン出版.